

小学生、中学生の居住地と行動特性についての考察

山田 裕 司

Consideration about residence area and behavioral characteristics of elementary and junior high school students

YAMADA Hiroshi

キーワード：コンピテンシー、社会的スキル、キャリア、学校効果、中山間地域

概要：生涯学習の視点に立ったコンピテンシーの発達が注目されるようになってきた。OECDは、国際的枠組みとして、キー・コンピテンシーを定義し、個人が獲得した資質・能力を測定するようになってきた。本稿では、小学生と中学生の学校生活を通して獲得したコンピテンシーを測定するため、社会的スキルの自己評価を基に考察する。さらに、子どもたちのコンピテンシーを測定する尺度である調査項目の検討も合わせて行う。

1. はじめに

本稿は、中山間地域で生活する子どもたちの学校生活がその後の行動や潜在意識に及ぼす影響を調査した¹⁾。結果をキー・コンピテンシーの概念に基づいて分析したものである。

2. キー・コンピテンシーとキャリア形成

コンピテンシーとは、学校教育におけるカリキュラムや課外活動における経験、日常生活において、個人を取り巻く社会環境で「意図的」、または「無意図的」に社会化された能力を指す。このコンピテンシーの概念は、Boyatzis (1982)、Spencer (1993) が「基準となる」コンピテンシーと「ハイパフォーマンス (高業績)」コンピテンシーと2区分したように、基準となるコンピテンシーと、それより優れた (または特化した) コンピテンシーという区分を行うことができる。

学校教育におけるコンピテンシーの議論は心理学の分野において行われていた。例えば、Connolly and Bruner (1973=1979) は、コンピテンスを獲得することにより「環境に適応することと環境を変える行動」ができると捉えた。そして、「社会に適した子ども、さらには社会を変える子どもを育成するためにコンピテンスの獲得が必要である」として、学校内外における教育的な行為の方法論やその影響について心理学的アプ

ローチで明らかにしている。また、教室における教師の教授法という視点からBradley (1987) は「Competency-Based Education」が、「カリキュラム、評価、教授および試験の相関性を確保することができ」、そのうえ「基本的な技能の成就を効果的にすることができる」と記している。彼らの提唱するコンピテンシーは、児童・生徒が身体化する基本的な能力とそれから優れた (向上した) 能力という2つの意味を示していたのである。

教育分野におけるコンピテンシー研究は、その後、経済協力開発機構OECDが1997年から「コンピテンシーの定義と選択：その理論的・概念的基礎」(Definition and Selection of Competencies: Theoretical & Conceptual Foundation (DeSeCo)) において行い、人生の成功や社会の良好な取り組み、国際的な合意を得た新たな能力概念を示した。DeSeCoはキー・コンピテンシーの概念を3つの基準に定義すると共に、キー・コンピテンシーを構成する能力について3つのカテゴリーに分類している。

表1 DeSeCoキー・コンピテンシーの概念

基準1：全体的な人生の成功と正常に機能する社会という点から、個人及び社会のレベルで高い価値を持つ結果に貢献する
基準2：幅広い文脈において、重要で複雑な要求や課題に答えるために有効である
基準3：すべての個人にとって需要である

表2 DeSeCoキー・コンピテンシーの3つのカテゴリー

分類1：社会的に異質な集団での交流
「他者とうまく関わる能力」、「協力する能力」、「対立を処理し、解決する能力」
分類2：自律的に活動すること
「『大きな展望』の中で活動する力」、「人生計画と個人的なプロジェクトを設計し、実行する力」、「自らの権利、利益、限界、ニーズを守り、主張する能力」
分類3：道具を相互作用的に活用すること
「言語、シンボル、テキストを相互作用的に活用する能力」、「知識や情報を相互作用的に活用する能力」、「技術を相互作用的に活用する能力」

「子どもの行動特性とキャリア意識」調査の分析では、キー・コンピテンシーを構成する3つのカテゴリー別に、子どもが獲得した能力を検証し、中山間地域における小中学生の特徴を考察する。

を設定し、居住地域の学校に通学し生活することで培った子どもの能力や特徴について考察した。

調査票では小学生、中学生の回答に際する時間的な負担を考慮し、表3に示す通りの設問数を設定した。

3. 調査の概要

宮崎県は面積の88.4%が中山間地域に指定されており、そこで生活する人口は県全域の37.4%である。特に、大分県と熊本県の県境地域は、交通インフラの整備も遅れていると同時に、自宅から通学する距離に高等学校が存在しないという現状にある。このような教育環境のもとで生活する子どもたちが将来の進路をどのように描き、学校教育においてキャリア形成能力がいかに培われているのか検証し、今後の中山間地域におけるキャリア教育のあり方について考察するため、教育委員会との協力のもと在学生の全数調査を実施した。

表3 調査票の設問数

A項目	学校での生活	14項目
B項目	学校での学習	7項目
C項目	家庭での生活	17項目
D項目	家庭での学習習慣	10項目
E項目	あなたのこと	3項目

A項目「学校での生活」では、児童・生徒の個人的な強み（自己評価）や、進路意識に関する質問を設定した。具体的には、「A7：がんばれば、できないこともできるようになる」、「A12：中学校を卒業したら、どうしたいですか」など。

3-1. 調査項目

居住地域と調査項目、子どもの特性の関連性は、図1の通りである。中山間地である2町2村で生活する子どもの特性を明らかにするため、「A項目：学校生活」、「B項目：学校の学習」、「C項目：家庭生活」、「D項目：家庭の学習」の4項目

B項目「学校での生活」では、児童・生徒の学習に対する向上心に関する質問を設定した。具体的には、「B4：自分の成績や自分のよいところをもっと伸ばしたい」、「B6：経験したことや考え

たこと、調べたことなどを、図や文でまとめることができますか」など。

C項目「家庭での生活」では、児童・生徒の生活習慣や家族との過ごし方に関する設問を設定した。具体的には、「C2：朝食を食べていますか」、「C8：休日は、何をすることが多いですか」など。

D項目「家庭での学習習慣」では、児童・生徒の学習内容や方法に関する設問を設定した。具体的には、「D2：毎日きちんと勉強をしていますか」、「D5：ラジオやテレビ、音楽などを消して勉強していますか」など。

3-2. 調査対象

対象者は将来の進路やキャリア・ビジョンを描き始める小学5年生と中学2年生とした。この時期の子どもたちは、小学5年生であれば中学校への進学や、中学2年生であれば高等学校への進学与、なんらかの形で将来のキャリア・ビジョンを考え出す頃であり、特に中山間地域で生活する子どもたちにとって高等学校進学は親元から離れる可能性が高い、大きな転換期でもある。

調査票の作成は、全国で実施している学力・学習調査等を参考に作成した。また、調査の実施は、高千穂町教育委員会から小中学校に調査の協力依頼を行い、各学校にて実施した（表4）。

表4 調査対象者と回収状況

	調査対象	回答者数	回収率(%)
小学生	104	104	100.0
中学生	118	116	98.3
全体	122	120	98.4

4. 高千穂町の子どもの特性

高千穂町は宮崎県の北部に位置し、日之影町、五ヶ瀬町と共に西臼杵郡に属する、人口12,793名（2015年2月）の町である。町域の西北部から北部にかけては熊本県に接し、北部から北東部にかけては祖母山（標高1,756m）を挟んで大分県と接する。1970年には人口約22,100名であったが、1980年には約20,000名、1990年には約18,100名、2000年には15,800名、2010年には約13,700名と、人口が減少している。

以下では、「学校の生活」、「学校の学習」について、キー・コンピテンシーの3つのカテゴリー「社会・文化的、抜本的ツールを相互作用的に活用する能力（個人と社会との相互関係）」、「多様な社会グループにおける人間関係形成能力（自己と他者との相互関係）」、「自立的に行動する能力（個人の自立性と主体性）」に基づいて考察する。

4-1. 学校生活の状況と児童・生徒の社会的スキル

調査票では、学校の生活について3項目、児童・生徒の社会的スキルの自己評価について7項目、小中学校卒業後の将来キャリア・ビジョンについて2項目、友人関係について1項目を質問した。回答者を「はい」「まああてはまる」と回答したグループ（肯定グループ）と、「あまりあてはまらない」「いいえ」と回答したグループ（否定グループ）の2つに分類しその傾向を考察した。

(1) 学校生活の満足度

高千穂町の児童・生徒は一日の大半を過ごしている学校という空間について、どのような印象を抱いているのだろうか。そして、その印象の要因はどこにあるのだろうか。次の3項目にて、この点について質問を行った。「A1：学校は楽しいですか」、「A2：学校が楽しい理由はなんですか」、「A3：学校が楽しくない理由はなんですか」。

学校生活の満足度については、小学生の94.1%が、中学生の87.9%が「学校が楽しい」と回答している。その理由は、小学生、中学生共に「友だちがいる」（小学生97.8%、中学生99.1%）、「クラスが好き」（93.9%、83.5%）が高い満足度であった。その一方で、小学生と中学生の満足度に関きが見られたのは、「勉強が好き」（49.4%、15.9%）、「勉強が分かる」（72.2%、55.0%）、「先生が好き」（61.6%、29.5%）であった。また、「学校が楽しくない理由」では、「勉強が嫌い」（25.0%、50.9%）、「勉強が分からない」（8.7%、24.5%）、「先生が嫌い」（4.4%、26.9%）であった。

(2) 児童・生徒の社会的スキル

コンピテンシーとは、単なる知識や技能だけで

はなく、技能や態度を含む様々な心理的・社会的なリソースを活用して、特定の文脈の中で複雑な要求(課題)に対応することができる能力である。「キー・コンピテンシー」とは、日常生活のあらゆる場面で必要なコンピテンシー全てではなく、「1. 人生の成功や社会の発展にとって有益」、「2. さまざまな文脈の中でも重要な要求(課題)に対応するために必要」、「3. 特定の専門家ではなくすべての個人にとって重要」という性質を持つと定義されている。

社会的スキルの自己評価では7項目を、キー・コンピテンシーの3つのカテゴリーに分類して、各項目について考察する。

(2) - 1 他者と円滑に人間関係を構築する能力

他人と円滑に人間関係を構築するためには、個人が知人や同僚などと個人的な関係を作り出し、維持し発展させる能力が必要とされている。具体的には「共感する力」、「感情を効果的にコントロールする力」などである。

調査票では児童・生徒が友だちや家族、地域の人たちと個人的な関係を作り出す力と、それを維持する力に着目し、次の4項目について質問した。個人的な関係を作り出す力は、「自分の意見をはっきり言うことができますか」、「相手の意見を聞くことができますか」、個人的な関係を維持する力は、「自分のよいところや得意なことを言うことができますか」、「自分のよいところを、まわりの人は分かってくれていると思いますか」である。

個人的な関係を作り出す力については、小学生の70.2%が、中学生の54.3%が「A9:自分の意見をはっきり言うことができる」と回答している。また、小学生の91.3%が、中学生の100%が「A10:相手の意見を聞くことができる」と回答している。個人的な関係を作り出す力の特徴は、1)小学生の68.3%が、中学生の54.3%が「A9:肯定」かつ「A10:肯定」と回答していること、2)小学生の23.1%が、中学生の45.7%が「A9:否定」かつ「A10:肯定」と回答していることである。

個人的な関係を維持する力については、小学生の73.8%が、中学生の75.0%が「A4:自分のよ

いところや得意なことを言うことができる」と回答している。また、小学生の68.3%が、中学生の79.3%が「A5:自分のよいところを、まわりのひとは分かってくれている」と回答している。個人的な関係を維持する力の特徴は、1)小学生の60.2%が、中学生の62.9%が「A4:肯定」かつ「A5:肯定」と回答していること、2)小学生の8.7%が、中学生の16.4%が「A4:否定」かつ「A5:肯定」と回答していること、3)小学生の13.6%が、中学生の12.1%が「A4:肯定」かつ「A5:否定」と回答していること、小学生の17.5%が、中学生の8.6%が「A4:否定」かつ「A5:否定」と回答していることである。

(2) - 2 協調する能力

他者と人間関係を構築し、協働するためには、各個人が一定の能力を持っていることが必要であり、その上でグループへの貢献と個々人の価値とのバランスを図ることができる力が不可欠である。調査票では、各個人の一定の能力に対する自己評価に着目し、以下の3項目について質問した。特定の取り組みに挑む態度「A6:つらいことでも最後までがんばってできる」、その取り組みを継続・発展する態度「A7:がんばれば、できないこともできるようになると思いますが」、取り組みを次の段階に発展させる態度「A8:難しいことでも失敗を恐れずに取り組むことができますか」に分類し、考察を行った。

取り組みに挑む態度については、小学生の86.4%が、中学生の83.6%が「A6:つらいことでも最後までがんばってできる」と回答している。取り組みを継続・発展する態度については、小学生の88.5%が、中学生の81.0%が「A7:がんばれば、できないこともできるようになる」と回答している。取り組みを次の段階に発展させる態度については、小学生の79.8%が、中学生の65.5%が「A8:難しいことでも失敗を恐れずに取り組むことができる」と回答している。特に小学生の取り組みを次の段階に発展させる態度は、1町2村²⁾の小学生の平均割合が73.2%であることを踏まえると、高いことが明らかである。

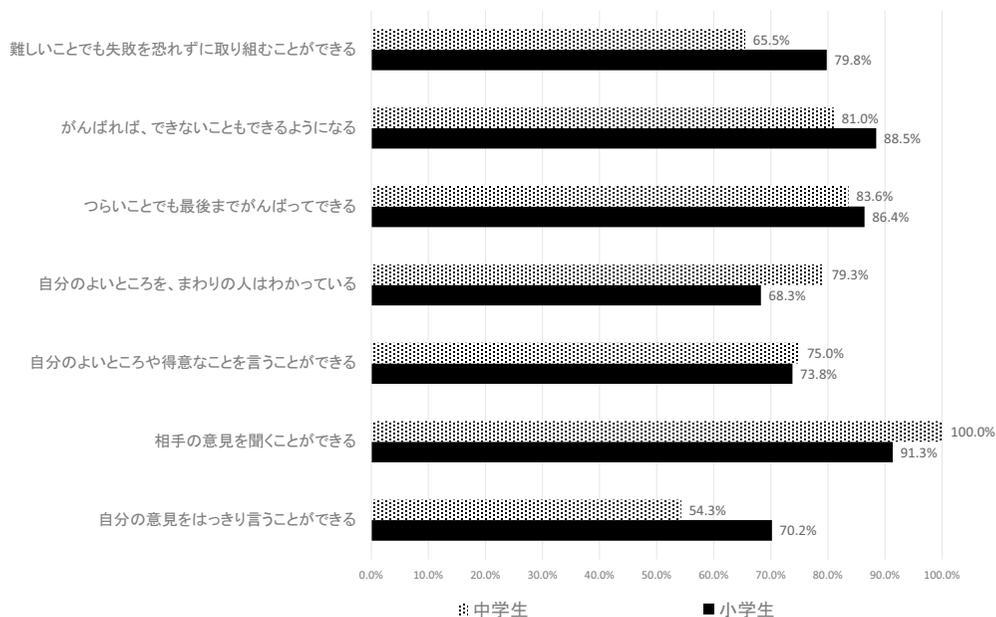


図1 他者と協調する能力

(2)－3 人生設計や個人の計画を創り実行する能力－自立的に行動する能力

周囲の環境や社会的な動きが、個人の将来設計になんらかの影響を与えることがある。中山間地域で生活する児童・生徒は自分の将来をどのように描いているのか、次の2項目で質問した。また、小学5年生、中学2年生は中学校への進学や高等学校への進学を1年後に控えた時期でもあり、将来のキャリア・ビジョンを描く、描き始める時期でもある。質問項目では、将来ビジョンについて質問した「A11：将来の夢や目標を持っていますか」と、中学校卒業後について質問した「A12：中学校を卒業したら、どうしたいですか」とした。

将来ビジョンについては、小学生の93.3%が、中学生の73.0%が「A11：将来の夢や目標を持っている」と回答している。小学生に比べて中学生の「A11：肯定」回答が低い傾向は、2町2村全体でも同様である。

中学校卒業後については、大学等の高等教育機関までの進学を視野に入れていることが明らかになった。「大学まで行きたい」（小学生59.8%、中学生45.3%）、「専門学校まで行きたい」（44.4%、

44.3%）、「短大まで行きたい」（14.3%、19.6%）の順で高い割合を示している。その一方で、小学生の25.7%が、中学生の12.5%が、中学校卒業後に「家の仕事をしたい」と回答していることも明らかになった。

高千穂町の児童・生徒の多くは将来のキャリア・ビジョンをなんらかの形で描いていることが明らかになった一方で、中学生の27.0%が「A11：否定」、15.4%が「A12：まだ何も決めていない」と回答していることも明らかになった。

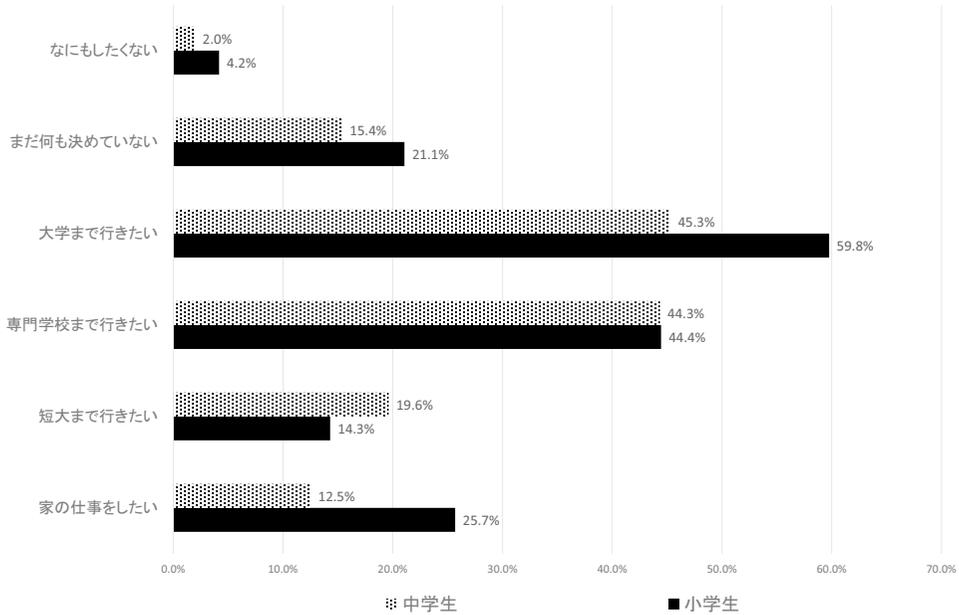


図2 中学校卒業後の進路希望

4-2. 学校における学習

調査票では、学校の学習についてキー・コンピテンシー 3分類のひとつ「社会・文化的、技術的ツールを相互作用的に活用する能力」の観点から質問している。

(1) 学習のモチベーション

児童・生徒の学習へのモチベーションについて、12の調査項目にて検証した。

小学生では、「授業がおもしろいとき」(93.8%)、「勉強がよく分かるとき」(86.5%)、「成績が上がったとき」(85.7%)の順で、勉強のやる気につながると回答している。中学生では、「授業がおもしろいとき」(90.9%)、「勉強がよく分かるとき」(81.7%)、「成績が上がったとき」(89.3%)の順で、勉強のやる気につながると回答している。他方で勉強へのやる気につながらないと回答している項目は、小学生、中学生に共通する項目では「テストが近づいたとき」(小学生39.5%、中学生44.5%)、「将来の夢がもてたとき」(45.5%、51.9%)、中学生では「新しい学年や新しい学期になったとき」(42.1%)である。なお、高千穂町の児童・生徒の特徴は、「家の人にほめられた

とき」よりも、「先生にほめられたとき」や「友だちにほめられたとき」と回答した割合が1町2村の児童・生徒よりも多いことから、学校における先生や友だちとの関係が勉強のやる気に影響力をもっていることが分かる。

(2) 言語、シンボル、テキストを活用する能力

PISA調査では、様々な状況において話したり書いたりする言語のスキルや数学的なスキル等を効果的に活用する力である「読解力」、「数学的リテラシー」の到達度調査を実施している。2000年、2009年調査では「読解力」が、2003年、2012年調査では「数学的リテラシー」をメインテーマとし、OECD及び各国では調査結果を踏まえた教育方法の改善に取り組んでいる。本調査では、読解力と数学的リテラシーについて1項目を設定した。読解力と数学的リテラシーは「B6：経験したことや考えたこと、調べたことなどを、図や本文でまとめることができますか」にて考察した。なお読解力に加えて、自分で調べたことや聞いたことについて理解し、熟考する能力について、「B4：自分の成績や自分のよいところをもっと伸ばしたいですか」「B5：授業中、進んで発表した

り、質問したりしますか」「B7：わからなかったことは、先生や友だちに質問していますか」にて考察した。

2)－1 読解力と数学的リテラシー

小学生の64.4%が、中学生の49.1%が「B6：経験したことや考えたこと、調べたことなどを、図や本文でまとめることができる」と回答している。小学生の64.4%は1町2村の平均回答割合66.9%より低い数値であり、中学生の49.1%は1町2村の平均割合46.4%より高い数値である。他方、中学生が読解力と数学的リテラシーに自信がないと回答している点は他の町村と同じ傾向である。なお、小学生よりも中学生の回答割合が低い傾向は、2町2村に共通した傾向である。

2)－2 見聞したことへの理解と熟考する能力

小学生の94.9%が、中学生の97.4%が「B4：自分の成績や自分のよいところをもっと伸ばしたい」と回答している。2町2村に共通する点として、小学生よりも中学生の方が自分の成績や自分のよいところをもっと伸ばしたいと回答する割合が高い。

また、小学生の62.5%が、中学生の37.1%が「B5：授業中、進んで発表したり、質問したりする」と回答している。1町2村の平均回答割合(小学生63.2%、中学生62.2%)と比較すると、小学生は同じ傾向を示しているが、中学生は2町2村の中で回答割合が低い結果となった。中学生の回答傾向は、生徒数が多い地域は「B5：否定」、少ない地域は「B5：肯定」を選択する割合が多いことが確認されている。同学年の人数やクラスサイズが中学生の「授業中、進んで発表したり、質問したりする」ことにどのような影響を及ぼしているのかについては更なる検討が必要である。他方、小学生の77.9%が、中学生の67.0%が「B7：わからなかったことは、先生や友だちに質問していますか」と回答している。1町2村の平均回答割合が中学生74.9%であることを踏まえると、わからないことを先生や友だちに聞かない中学生が他地域に比べて多く、約3割いることが分かる。

以上から、次の知見を得ることができる。

- (1). 小学生の55.8%、中学生の29.6%が「B5：肯定」かつ「B7：肯定」と回答している。小学生の約50%、中学生の約30%が積極的

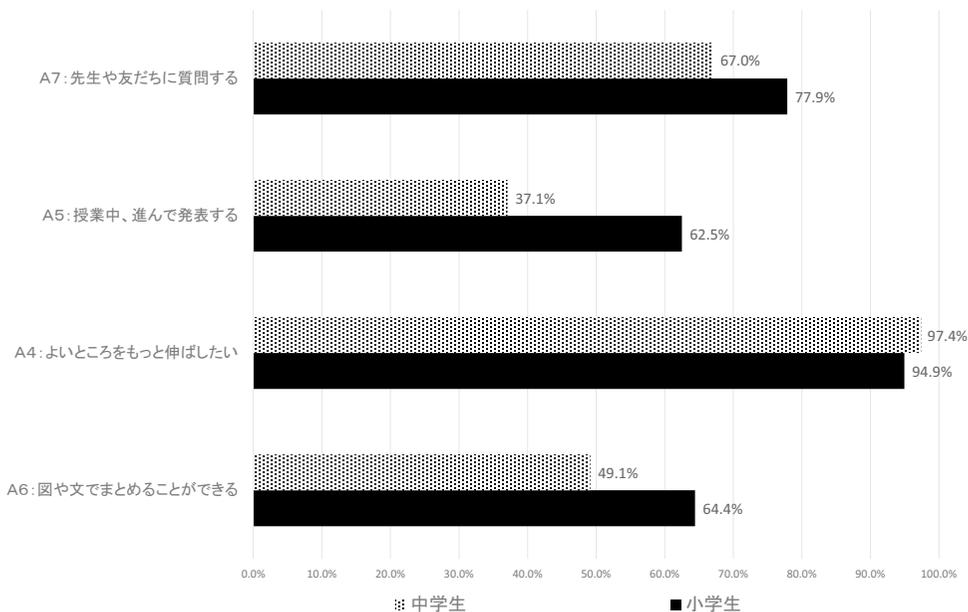


図3 言語、シンボル、テキストを活用する能力

に授業に参加している。

- (2). 小学生の22.1%、中学生の37.4%が「B5: 否定」かつ「B7: 肯定」と回答している。中学生の約30%が授業中に進んで発表や質問はできないが、授業以外に先生や友だちに質問し解決に向けた行動を起こしている。
- (3). 小学生の15.4%、中学生の26.1%が「B5: 否定」かつ「B7: 否定」と回答している。中学生の約30%が授業への参加が消極的かつ、分からないことを解決する行動を起こしていない。

5. まとめ—児童・生徒の学校・家庭における生活

児童・生徒の学校生活や家庭生活において、自分たちが住む地域（環境）が与える影響は大きい。特に中山間地域では、児童・生徒にとって学校以外で学習する環境が整備されていないことは事実である。こういった調査の目的は住む地域（環境）が「学力」に及ぼす影響を考察する際には有効である。しかし、1990年代後半からは、OECD（経済協力開発機構）等の国際機関が主体となり教育分野の国際比較指標の開発に取り組み、「生涯学習の視点に立った個人の基盤となるコンピテンシーの発達」（立田監修2006）に着目し、その能力の点検・評価を行うようになってきた。つまりは、学校内におけるテスト等における「教育の即時的な効果」の測定から、社会で生活する上で自分の目的に応じた、自分らしい生活を送られるような「教育の遅延的な効果」の測定を行うようになってきたのである。

本調査では「キー・コンピテンシー」の概念に基づき、高千穂町で生活する児童・生徒の状況を考察し、高千穂町に住むことで身につけることができる、身につくことができた児童・生徒の特徴について考察し、2つの特徴を明らかにすることができた。

- (1). 小学生の約95%、中学生の約90%が「学校生活を楽しんでいる」ことである。小学生、中学生共に友だちやクラスの仲間との関係性が良好であることが、学校生活を楽しむ要因となっている。高千穂町では「個人的な関係

を作り出す」能力である「相手の意見を聞くことができる力」（傾聴力）に自信のある児童・生徒が多いことがひとつの特徴である。中学生では「自分の意見をはっきり言うことができる力」（発信力）に自信のない児童・生徒が多いが、「自分のよいところや得意なことを言うことができる力」（発進力）には約70%が自信をもっている。

また、「将来の夢や目標」を持っている小学生が90%以上、中学生が70%以上いることもひとつの特徴である。学校・家庭生活において培っているのである。さらに、中学校卒業後の進路についても、大学や専門学校を視野に入れている児童・生徒が多いこともひとつの特徴である。

- (2). キー・コンピテンシーの3分類の1つである「言語、シンボル、テキストを活用する能力」では、「読解力と数学的リテラシー」において小学生の約30%、中学生の約50%が「B6: 図や文でまとめることができない」と回答しているが、「自分の成績や自分のよいところをもっと伸ばしたい」と回答する意欲的な児童・生徒が90%以上いることから、学校や家庭にて「読解力」、「数学的リテラシー」を培う教育方法・内容を展開することで、さらなる育成が期待できると考える。

キー・コンピテンシーによる教育成果の点検・評価を通して、今後の課題が浮き彫りとなった。第一に、キー・コンピテンシーが及ぼす児童・生徒の学校や家庭、地域における行動特性を追跡していく必要性である。ヘックマン（2016）は40年以上にわたり、個人の成長と非認知スキルの関連性を明らかにしてきた。追跡調査を行うことで、高等学校、高等教育機関が居住地域に存在しない中山間地域の子どもたちのキャリア形成を支援している要因について詳細に分析すると共に、居住地域による教育の不平等を解消する教育手法の開発につながると考える。第二に、子どもを対象とした調査における調査項目、調査時期、調査方法の再検討をする必要性である。社会的スキル、

キー・コンピテンシーなどの子どもの資質・能力を測定する評価尺度について、更なる検討を重ねることが調査結果の精度を高めると考える。

6) ジェームズ・J・ヘックマン著、大竹文雄解説、古草秀子訳、『幼児教育の経済学』東洋経済新報社、2016。

注

1. 「子どもの行動特性とキャリア意識」は、2014年に、椎葉村、諸塚村、高千穂町、日之影町、五ヶ瀬町の小学5年生、中学2年生の全員を対象とした調査である。
2. 1町2村は日之影町、椎葉村、諸塚村。以下の考察においても、高千穂町を加えた、2町2村の小学生、中学生の比較を行う。

引用・参考文献

- 1) Boyatzis, R.C., *The competent manager : a model for effective performance*, New York : Wiley, pp20 - 21, 1982。
- 2) Leo H. Bradley, *Complete guide to competency-based education : practical techniques for planning, developing, implementing, and evaluating your program*, Englewood Cliffs, N.J. : Prentice Hall, 1987。
- 3) L.M.Spencer, Jr. and S.M.Spencer, *Competence at work*, New York : Wiley, 1993。
- 4) K.J.Connolly and J.S.Bruner, *The Growth of Competence*, 1973. コナリー、ブルーナー編著、佐藤三郎訳編、『コンピテンスの発達 - 知的能力の考察 -』誠信書房、1979。
- 5) D.S.Rychen & L.H.Salganik, *Key Competencies for a Successful Life and a Well-Functioning Society*, Hogrefe & Huber Publishers, 2003. ドミニク・S・ライチェン、ローラ・H・サルガニク編著、立田慶裕監訳、『キーコンピテンシー 国際標準の学力をめざして』明石書店、2006。

Key Word : competency, social skill, career, school effect, betwixt mountains

Summary

The development of competency from the viewpoint of lifelong learning has been drawing attention. As an international framework, the OECD has been defining key competencies and measuring the qualities and abilities acquired by individuals. In this paper, in order to measure the competency acquired through elementary and junior high school student life, I will consider based on self-evaluation of social skills. In addition, I will also examine the survey items which are scales for measuring the competencies of children.

In this paper, based on the concept of "key competency", considering the situation of children and students living in Takachiho Town, they can learn by living in Takachiho Town, students who were able to learn I could examine the features and clarify the two features.

First, about 95% of elementary school students and about 90% of junior high school students are "enjoying school life". Both elementary school and junior high school students have good relations with friends and classmates, which is a factor of enjoying school life.

Secondly, about 30% of elementary school students and about 50% of junior high school students answered "B6 : I cannot organize with drawings or sentences" in "reading ability and mathematical literacy". Furthermore, more than 90% of ambitious children / students answer "I want to further improve my grades and my good points"